

## 「YN26」の高品質果実生産について

果樹試験場 主任研究員 中谷 章

## 【要約】

「YN26」の日焼け果対策として炭酸カルシウム剤（薬剤名：ホワイトコート）25倍の2回散布が有効である。また、7月上旬から収穫期まで比較的弱い水分ストレス（日没直後の葉の水ポテンシャル（以下、LWP）で $-0.8\sim-1.1\text{MPa}$ 程度）を維持することで、果実品質を高めることができる。

## 【背景・ねらい】

「YN26」は9月に収穫でき、県オリジナル品種のトップバッターとして栽培面積が増加しつつあるが、ブランド果実である「紀のゆらら」として安定して生産するための栽培管理技術が求められている。

そこで、本研究では夏期に問題となる日焼け果の対策技術とともに高品質果実生産のための水分管理について検討した。

## 【成果の内容・特徴】

- 1) 炭酸カルシウム剤の25倍液散布による日焼け果軽減効果は、7月の1回散布より7月および8月の2回散布で効果が高かった（図1）。
- 2) 水分ストレスによる糖度の上昇は生育期間の前半（7月）で大きく、8月以降では7月と同程度の水分ストレスをかけても比較的糖度の上昇が鈍い傾向であった。また水分ストレスが弱すぎると糖度の上昇が鈍かった（図2）。
- 3) 7月上旬から収穫まで比較的弱い水分ストレス（LWPで $-0.8\sim-1.1\text{MPa}$ 程度）を維持することで、「紀のゆらら」の品質基準（糖度10度以上、クエン酸1.1%未満）を上回る果実を安定して生産できた（データ省略）。

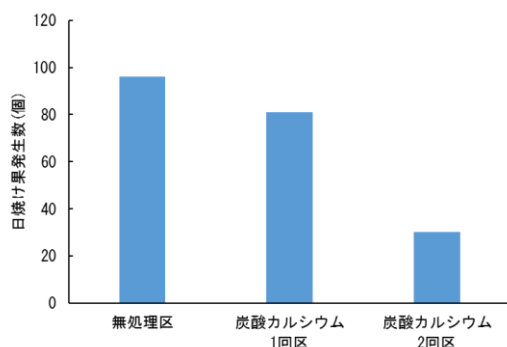


図1 炭酸カルシウム剤(25倍)の散布回数の日焼け果発生に及ぼす影響

※日焼け果発生数は3樹合計  
1回区は2022年7月10日散布  
2回区は2022年7月10日、8月9日散布

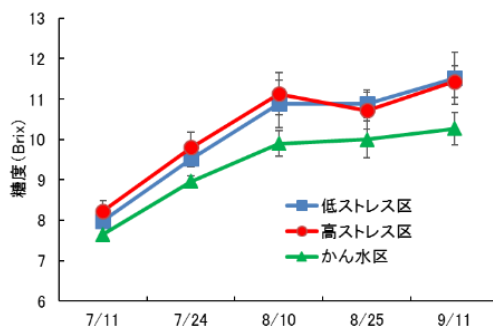


図2 水分ストレスの違いが糖度の推移に及ぼす影響

※低ストレス区：LWPを $-0.8\sim-1.1\text{MPa}$ 程度で維持  
高ストレス区：LWPを $-0.8\sim-1.4\text{MPa}$ 程度で維持  
かん水区：LWPを $-0.6\sim-0.9\text{MPa}$ 程度で維持